

惜陰雜抄

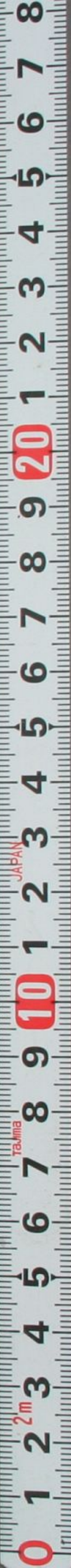
卷之四

特別

14

1919

732



持

1919  
115

732

是れ天地ハ風雅より萬象もよる

風雅より此ハ雅ハ佛祖の肝膽

より造化に在る四時を友とする

る所花より草より事々々おもひの所



月をまはしての車まはして月を  
ふみば禽獣に等しくかたき花に  
あはさんば夷狄に類す夷狄を  
出禽獣と離れんと生死に拘る

とらう 草蓮

るんちんていの二さうらふ車は心  
天也(ちん)も世をおとらかんとらふ  
車まはつ天(てん)も月(げつ)も花(はな)  
心(しん)といふ花(はな)も心(しん)も花(はな)  
いろめまをわぶとらう野馬は

風のうねるおぼろの光のまはりの  
籠もつつかさく、蛇はその心にあ  
まはさるまはるのまのこころ  
とうちんこころのまはるはなとうちんて  
かましかんはおぼろ時のこころ  
まぬのまはるまはるまはる  
まはるのまはるまはるまはる  
まはるまはるまはるまはる  
まはるまはるまはるまはる  
まはるまはるまはるまはる  
まはるまはるまはるまはる

とわ人むや世にふくよふに  
あまはとるはとるはとるは  
とるはとるはとるは

世は世とてとてとてとて  
いととととととととととと

とととととととととととと  
玉<sup>たま</sup>越<sup>こ</sup>の内<sup>うち</sup>裏<sup>うら</sup>の<sup>の</sup>心<sup>こころ</sup>を<sup>を</sup>た  
中<sup>ちゆう</sup>一<sup>いつ</sup>字<sup>じ</sup>笑<sup>わら</sup>の<sup>の</sup>朝<sup>あさ</sup>ほ<sup>ほ</sup>く<sup>く</sup>手<sup>て</sup>を<sup>を</sup>た  
洋<sup>やう</sup>田<sup>でん</sup>桑<sup>そう</sup>と<sup>と</sup>久<sup>く</sup>世<sup>せ</sup>其<sup>その</sup>心<sup>こころ</sup>の<sup>の</sup>錦<sup>にしん</sup>の<sup>の</sup>心<sup>こころ</sup>  
取<sup>と</sup>今<sup>いま</sup>身<sup>み</sup>は<sup>は</sup>深<sup>ふか</sup>冬<sup>ふゆ</sup>の<sup>の</sup>心<sup>こころ</sup>を<sup>を</sup>た

に去るもいづれも道もなほ  
断つて降りくるの純白の流  
に袖の濡れ果てしと海山淡菊  
石室の窓のけしき雪の散る粒反  
の浦にやと塩の辛き浮世の物

か白と行かんとまは東山山岸の秋  
瓜身にしさを朝多夕まん夕き懐ん  
しぬは沈の鐘の音もささると今  
宵の悔れもろのらしと暗き一宵  
露を拂ひおとす百歳の柳の月

をー愛と珍ふん 久坂元瑞  
七行書

袿園崎原播木所傾城狂人の其

中の病を果てんむと死るーやんし

此ら忠か不忠か多りせぬむい子

久坂元瑞  
大石良雄

(原的) 内公忠懼流言日王莽

莽論下士時假使當時身便死一

生忠偽有誰知 李白

ちき此の朽糸たをやくんあんま

か吹くわいる 私か心のやくせなま

思ふ辰海にわくせぬい 折里基

(原注) 酒頭楊柳枝已被春風吹

去心將欲絕征人何得知郵振

し心なきがむんちけきを去き

去か袂情をうらみ君をなむつちや

愁のつらつらし仙翁春夫

(原注) 風花日將老在柳當凋

不徒曰心人、空結同心草薛濤

多んて吹く名跡や惜しき春柳の手

折一枝をしるふ春風宣於巢

(原注) 春風吹楊柳綠向糸立馬煩君

折一枝時有春風最相惜殷勤心

又向手中吹楊匡源



たむやあの花踏み散らす夢をいな  
せしれも礼晴かすなよふけはむ賤か  
目も合ひし夢も人とも夢に地に見せ  
ぬわいのふ 秋山玉山 赤起黄巻思  
にくかぬものさといと一説一さは  
いとりなるふちる 圓の月さふいほり

の夜のも山はとぎんくのさう夢  
はあうらうらう 手枕のーたぎんに残る移り

春 柳里茶  
夫ね思

室さめなき 秋の夜の月か隠れて入  
う雲か雲か月をは隠すものかこゝろひ

春よ今宵なぞにお前こそやうに昔  
いとひとり寝せんま枕はあつがかわいひ

柳里春  
月の松

よきふゆあぬ舟もなやこづこづ  
とら波のうづらにこゝろ身の程に

ついで志まき古里の風のつとせに思ひ寐の  
松の花にかもんども夢ははげあそをきま  
の夜のあけそ垣穂の卯の花もあや  
めもわかぬ五月閑花橋の香をととめそ  
昔信ぶの摺衣袖のふゆぬをそほかぬ

梓の露も流る玉の結かけを頼むらう  
 契り人はいまのふゆの世にわさる報  
 いやはしやまのりしやまのり花  
 七言も雲も波もあふ世のあはしいや

柳里恭 梓の露

朝顔かたも牛にも振りはらうと  
 うつぶきや涙の露かちる山陽  
 たのまれぬ物といふと我は出ん涼  
 言のまら世にさそはぬ別れを  
 人さよふもなほあふ世にわさる

たゞきとはぬを鴨川のあくさるゝ氣  
きつめんとゆかづの色は見えさう  
ら肌にはづかゝ老の流中島標燈  
花じりも  
金盞與端白在手欲傳却已  
三志中人

花舟希、於加多浦、佐伽豆伎佐  
之氏、人目高藝良須、伎都禰拳  
花舟曉之若流舟向四午垂楊  
而色湛遠裏後知み勝やの  
お思偏在ふ言中

藤下や日毎にお客のいひこね

道つは流さうこゝろよ

柳は花さくさくなる風情をさききり

にわか風は思ひて一かき音さき

はひなな〜と休く人をさき秋は

一夏のぬに冷さを風はあみ冬は

〜んおもしろく雪にまみ深

〜

昔いやく〜今ねときあついなまをいまんとあ

〜をのむかぢう出て人をうやまふ

人必しうたたまをいさとしをふ今いやく  
若たときあり、いまをかくみず若にのみ  
ほくらが目まんば人かろもつ笑ひし  
これにくらむおんまをば人へらし  
とのんへらもば人まう  
中井整庵

某若き時大内の名紙と見付る中  
に即今うの折や一雪の積りけり  
衛士の仰を楯の雪掃かせんけな  
傍る松が枝もたけらるる恨めけに  
別お返りそとむけり是ん心もききあ末

を閉眼しきま勢う女おは栢の雪を拂  
はせしむ栢か羨みとおのれと枝を別ぬ返  
しこれわらう雪をはぬおとし恨みさ  
思ふもささく流きと御く心地さ  
すや 止ねつ左

女のまき甘きうば衣紋も冠もいふもあ  
引つゝあ人もはらうか人に恥しめ  
いかばかりいふときおむと思ふは女の性  
皆いかき人我のおあかき貪むとあは  
しく栢のぬとしきうたふかたに





たけなはたのこ 晴る

雲のふきは月のたえ風の散すは

そなたえいとふとのあつてこも月

と花を尊とけれ 能く深き

そよひのこゝろのまぢらけ

げのえとあはは七つと人 たのこ

七やまのこゝろ 上陽

自ら心をはかさん善の骨もあつて

を離るもあつて風前のなみの鹿きや

すきかゝ又涼のやの甲の静さう難

きん似たり鴨也

むかしくまきんあまの慈母の恩意

母の懐抱めん春あり暮れ

かんば、花咲く三々五々、五々は暮れ

三々は白し記得す去年此路より上

五月ふやむ夜いそがしの月

暮れ

(原の)に長夏をそ寐連宵聴る所

何時忽四月杉影庭前程劍雨

えんしき事は忘れやまし心のとけぬ

ふかたるふぼるふしかなしき事は大

やうまんかたし心結ほむと潸かたきん

ばるししちまの井やちりうし  
ーとらあれこーこーは多くをか  
きせあひあひあひあひあひあひ  
どくまは年のおほいあひあひ  
まじうちわあひあひあひあひあひ

のりつゝいゝあひあひ — 中井琴庵

今い思いのまにちまも昔に白か花の  
袖海をかきあひ行丈もちあんと揃ひ  
し若氏にあああの名をばああああ  
のろろけのほひ昆布、縁と月を

時ちあはせはは、嬉しからうぢやあ

まのか 中島 春の袖

春山上人云皮相の子は世に活るは  
らう人その舞ふをさと見ても其楽を  
見す西の風をまゝに春あてあ

しろの星かたから風をまゝに  
切を祢のよきはこゝろよ  
けのと獨りあう旅まは輝に二合  
まゝにわさはずあな  
まゝにわさずあな

人を友とて危にかけぬの音もあけ  
きま千ヨシくの栢も木すまやこまキリ  
うしちへまいらは糗糲瓶ハヤらう  
飯櫃味留栢酒の通うとあき

光因是壽保曰おろ滞りす

は着てぞ神保を尊いりて神保を  
駈し佛老を崇め而も佛老を扱  
濟せしむる解せんことを求めず  
いも飲いと飲はず真愛も真愛と

七

ささいあまふき和歌に云く

鷄鳴く朝も持てえてるよの海

東いんかを丸もはえて沖津色に帆船群し

若ぬ海の由 若潮魚堂村上百次中心

多言るもの智に似たり思ふもの

常ちん似たり性あるもの ぬに似たり

懶惰るもの寛に似たり隘るもの

似たり深るもの勇に似たり後る

もの方に似たり察せたるもの

門の朽葉に酒を尋ぬれば 審つる

捨て、麦茹にとや 枯れつる店

に夜ころむて 白川音の危なる

山中尋酒（右朝又終）

聖もまばらに庵の住く 夢寒く  
しとあーかにいたく 杉戸開けば物  
葉のもしそ 雪の時を焚て茶を煮

う 閑居の夜集  
續後羽取集

まぶしくは雪につらむ 野は木

菊のちやがちまゝいふにま音の伊左

かあんともつみ葉に腰の老にけ

らしあ 人日 後羽取集

木の葉敷つくしと冬もまの 路次に相  
のちうめうらゝ けあをぬまきかたに

くくいろりの 窓は差た白ふ口切の  
客 が用(全上)

はれおろく我床になけ 鳴音を菊  
の夜こそ寝えぬ 寝えぬ俵に灯  
照して見れば 萩もまきか霞う乱れ

七 促郷 本朝又鑑

葦村隠席一杉山月亭の音をたそそ  
はと、まゐん大井原を 濁り月夜と  
葦村の白偃えん似たり

門松は冥途の旅の一里塚も氣  
はつふで無よん新暮のつまをと壽き懸





あーきことわつめ心にいせぬはすなはら  
あそ、すなはらほはるふーちきこの上の思  
きは見やまけのころあーき入のち  
ことしとほままく思くさうたもへい  
かいたぬは、ま〜た同えと、うちほへい  
リ 中井徳元

を尋の清く死に命ふこころ  
まゝが我生むるの無念死果  
死ある時の我の改まらざる  
ア、じりロス  
今も我の急きを松と紙けん死

ゆりのあふぎの如くゆりたるは  
何ふらん我又再び飲まんのみアチリ  
我ん墓中も歌はん人よ飲め  
時若くして死海を我ぬく寒冷  
るるいめさる前と飲の口上

吟呼快樂の子や女子よ天は海  
美を興く眼の光と世つたり眼の光  
はは飲るの矢も敵するの力さく  
美のほ飲るを飲るのほ飲る者  
清く去るべし女子よ美しき我

酒を飲めば微笑せよ世の酒の酔  
は弱かるべし 丁字の字

愛と美の束縛よ若し之を束縛と  
云ふと云ふに法語の自由を  
頼みぬまゝ 曰

エロキユラスの徒曰く飲合するに若しん  
我等の死す可ぬは云ふと楊子曰く  
萬物の言するは生也曰くは死は  
死す生とは賢愚の賤あり是  
生の果る所死すは身は

減ちて是れ死の同一き所也十算も死し  
る算も死し仁重も死し夷也も死す  
生ればこそ舞臺をらん死すらんは皆  
腐骨ろろ生んはこそ柴付らん死  
すらん腐骨ろろ孰んか其果

まうとちん

情慾の遂行する急を速成の  
貴道とてこの程り忠愛は  
根柢が弱く容易に引抽かぬ  
男は自分の腹をる人の女も終んが

癖に女も自分一人の腕ははかす儘  
せしむるとする誤まの結婚は洗濯を  
まもることもいふ事ありとて石鹸の  
役目を勤めしむる物なり

昭和十五年十一月二日終日龍

予一妻才手手讀むる暇く徒々

半と事也物と鈔紙と多及ふ事

一冊出きおす書物と惜陰

竊物と事也光陰と惜ふの事也

九子二氏を借るるの身談也

えんか

春城病後



